

日本ハリストス正教会教団 西日本主教教区報

西日本正教

No.138
Summer, 2015

西日本主教教区宗務局

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283
京都ハリストス正教会内
電話・FAX (075)231-2453 Email: ocj_kyoto@yahoo.co.jp
郵便振替 01030-5-18547



内 容

西日本主教教区 教区会議報告、教区センター建設、全国公会報告

西日本主教教区ニュース

「苦しみを受け…」、「ヤコフ・チハイの故郷を訪ねて」

宣教献金芳名録 主教区 活動のご案内

西日本教区センター 成聖式・祝賀会



二〇一二年六月の教区会議で長司祭
グリゴリー小川神父より建議、承認さ
れ、府主教タニイル座下のご祝福を得
た「教区会館建設」、その具体的な計
画立案は一三年八月の第一回建設委員
会から本格始動しました。十回開催さ
れた委員会でもとめられた建設計画は
一四年六月に関係各レベルでの承認祝
福、施工業者選定を経て、一四年一〇
月二日の起工式から約八ヶ月の工事
を経て成聖式を迎えました。

各地から集まった参加者たちはみ
な、聖堂と周辺地域の景観に調和した
上品な偉容と、ゆったりと機能的に配
された内部に、感嘆の声を上げました。



六月二〇日(土)夕方五時から京都生神女福音大聖堂にて晩禱。松島師
司禱、小川輔祭・伊藤輔祭らも陪禱しました。

二二日(日)九時四五分入堂式、いよいよ記念の主日聖体礼儀が始まり
ました。ダニイル府主教座下、セラフイム大主教座下、京都歴代司祭のマ
ルコ小池祐幸師、イオアン小野貞治師、西日本の五司祭、駐日ロシア正教
会のニコライ・カツバン師、東京の松浦清博首輔祭、高橋昭治副輔祭、田
中和幸神学生らと、堂内を埋めつくす信徒の人波。水口師の聖パン献納、
佐藤道雄聖歌指揮者と共に歌う合同聖歌隊のすばらしい聖歌。

領聖後の一二時頃、西日本教区センター成聖祈禱、順調に祈禱が執り行
われ、まずセラフイム大主教座下より祝辞と記念品贈呈、次にダニイル府
主教座下より祝辞と記念品贈呈、そのあと竣工なった教区センターを背景
に記念写真。

一三時より記念祝賀会開始。ダニイル府主教座下の御挨拶、感謝状贈呈
(喜多隼紀建築士・創真建設・西澤嘉信兄)、ニコライ・カツバン師、小池
師・小野師の祝辞、バイオリニストのフーリン兄による演奏、記念聖像
製作者の白石孝子先生の紹介など。境内まで会場にした祝典をたのしみま

した。

北海道から九州まで、京都聖堂近隣の皆様も多数来会され、
出席者は二一五人に達しました。賑やかな祝典は京都の佐藤
孝雄執事長の謝辞、松浦首輔祭主唱による「幾歳も」をもつ
て閉会しました。

大阪はじめ各教会信徒の奉仕者の皆様、記念品クリアファ
イル作成の小田切裕高兄、聖アンドロニクのリーフレット作
成の丸尾ご夫妻、ステンドグラス作成の西澤摩耶姉ら、ご協
力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

教区センターは、牧会の充実・宣教の展開、教区信徒の一
致・結束の象徴として、これからますます活用されていくこ
とでしょう。総局役員はじめ全国の皆様、西日本へおいでの
時には、どうぞお立ち寄りください。お待ちしております。

西日本の神品教役者・信徒と共に、全国の皆様のご理解・
ご協力に、重ねて感謝と御礼を申し上げます。(及川)



西日本天主教教区 会議

6月20日（京都）

六月二〇日（土）ダニイル府主教座下ご臨席のもと、西日本天主教教区「教区会議」が京都ハリストス正教会、生神女福音聖堂、新たに建設された西日本教区センターを会場に開催されました。

司祭会議・教区理事会

教区会議開催に向け、一八日（木）午後一時半から六時までダニイル府主教座下の祝福を得て、教区司祭会議開催。

一九日（金）、午後一時会計監査、二時から理事会。理事会では、ダニイル府主教座下のお言葉、過年度と新年度の業務報告・計画（及川）、全国宣教企画委（水口師）、諸規則検討委、献金委（松田輔祭）、

決算報告・監査報告・予算案の説明・承認（佐藤財務部長）、教区宣教献金の概要・御礼、また教区センター建設についての経過説明と御礼が述べられ、これらすべてを原案どおり本会議にかける事が決議されました。

教区会議 新年度教区活動と懇親会

二〇日（日）午後二時半～本会議。議長ダニイル府主教座下のもと副議長に松島師・佐藤孝雄兄、書記に後藤師・伊藤輔祭を選任、議事が進行。ダニイル座下の「生神女マリア」についての訓話後、理事会から上程された過年度と新年度の業務報告・計画、教団三委員会報告、財務部長から決算報告・監査報告・予算案の説明と承認、宣教献金の御礼などと質疑応答がありました。教区センター建設については、経過報告、感謝と御礼が局長より述べられました。教区ばかりでなく各教会、信徒の皆様への御篤志に深く感謝申し上げます。ありがとうございます。今年度の活動計画として、冬季セミナーは二月一日京都、教区学びの会に代えて、教区センター成聖記念連続講座、教区協賛行事として、九月広島戦災永眠者記憶パニヒダ、一〇月人吉聖堂修復成聖式、十一月福岡伝道所成聖五周年、一月福岡聖歌の会などが決定されました。出版物、西日本正教年二回発行、宣教冊子、宣教献金募集広報は一月に。さいごに七月全国公会代議員が選任され、三時に会議終了、記念写真。広大な西日本各地から参集した信徒の皆様、ありがとうございました。（及川記）



十 永遠の記憶十

5月13日、休職中の長司祭イオフ馬場登師が肺がんのためご永眠されました（享年七七）。横浜、盛岡、静岡で伝教者としてご奉職、フェオドラ山村久美子姉と婚配、翌一九六四年に司祭叙聖され、静岡、小田原、仙台、函館教会を管轄され、二〇〇八年に休職され、出身地である上磯のご自宅で、上磯教会の奉事補助や日曜学校のお手伝いをなさりつつ、静穏な余生をお過ごしになっていました。埋葬式は19日、上磯正教会で仙台の天主教セラフィム座下ご司禱、教区内の陪禱により行われました。西日本天主教区でのご奉職はありませんでしたが、東海道宣教ブロックが活動していた時代には名古屋、半田、豊橋の信徒には思い出深い神父さまです。（写真は二〇〇七年函館での復活祭十字架、Gベスストレミヤンナ姉提供）



7月31日、長司祭ペートル及川淳師は休職後の晩年をお過ごしになっていた盛岡で、脳出血のためご永眠。ペートル師は、西日本天主教区宗務局長、長司祭パウエル及川信師の御尊父で、享年八五。神学校卒業後岩手県内で伝教者として活躍、アンナ姉との結婚後、一九五九年司祭に叙聖され引き続き岩手県内の諸教会を司牧されました。さらに釧路教会、盛岡教会、前橋教会、盛岡教会と歴任、二〇〇四年にご休職されました。アンナ姉に先立たれた後も、お子様たちの養育を男手一つに担いながらも、ユーモア溢れる温かいお人柄で笑顔を忘れず、信徒、同僚の誰からも親しまれました。葬儀は8月3日、4日の両日、盛岡教会でセラフィム大主教座下のご司禱、東日本天主教区司祭の陪禱で執り行われました。写真は教区センターの成聖式典（6月）にはるばるご来会くださった時のもの。

全国公会

7月11・12日 (東京)

七月一日(土)

東京ニコライ会館において、一三時開会祈祷、ダニイル府主教座下の開会宣言により一五年度全国公会を開始。議長ダニイル座下のご指名により、副議長(ワシリイ加藤師・イオナ近藤兄)・書記・議事録署名人・議事運営委員等が選任された。そのあと副議長の司会のもと、ダニイル座下の訓示、教団活動報告(サワ大浪総局長)、全国宣教企画委員会(ダヴィド水口師)、全国献金委員会(マルコ小池師)、諸規則検討委(コンスタンティン柘田師)、西日本教区センター報告と御礼(及川)など議事が順調に進行した。夕方六時から東京復活大聖堂で晩祷が執り行われた。

一二日(日)

午前中、ダニイル府主教座下、セラフイム大主教座下、全国の司祭が陪祷する主日聖体礼儀では、小聖入時に昇叙式が行われた。イサイヤ酒井師・イオアン小野師を長司祭に任命し飾十字架・パリツアを、ステファン桑原師に金十字架・ナベトロニクを授与。領聖後、終戦およびセルギイ府主教永眠七十年を記念して教役者記憶パニヒダが執行された。

昼食後、公会第二日目の日程案に沿って議事再開。過年度決算報告(小島財務部長)・監査報告、予算案上程が行われ、いずれも全会一致で承認。建議案としては古川教会跡地・信徒遺贈分の処理について教団に一任することを決議。会計監査の選任、人事異動の発表などの議事のあと、セラフイム座下の閉会の言葉・閉会祈祷、祝賀会をもって公会は無事終了した。遠く西日本から出席された皆様、猛暑の中ありがとうございました。

教団人事異動

司祭ダヴィド水口優明師(大阪)

↓岩手県盛岡正教会(盛岡管区)へ

司祭ゲオルギイ松島雄一師(名古屋)

↓大阪正教会(大阪管区)へ

司祭ミハイル対中秀行師(盛岡)

↓東京復活大聖堂教会へ

「幾歳も！」(昇叙)

長司祭昇叙飾十字架、パリツア佩用

長司祭イサイヤ酒井以明師(豊橋)

長司祭イオアン小野貞治師(東京)

金十字架ナベトロニク佩用、カミラフカ・スクフイヤ祝福

司祭ステファン桑原建夫師(前橋)

(及川記)



教会代表者懇談会

五月六日（水・祝）西日本主教区主催・教会代表者懇談会が大坂教会にて開かれ、西日本主教区の各教会の代表者二十一名の方、それからパウエル及川神父様、ダヴィド水口神父様、ゲオルギイ松島神父様、エフレム後藤神父が参加しました。西日本主教区では久しぶりの開催ですが、同じ教区内の他の教会のことをより深く知ること、困っていることや悩んでいること等について知ること、西日本主教区が一つの主教区として共に歩んで行くことを目的に開催されました。ここで何か決定するというよりも、気兼ねなく各教会の代表者の皆さんが質問をしたり、意見を交換する場となりました。

開会祈祷の後、ゲオルギイ松島神父様の司会のもと、各教会の代表者の方が簡単な自己紹介しました。次に豊橋教会、名古屋教会、半田教会、九州北教会、徳島教会、高松教会、和歌山教会、神戸教会、京都教会、大阪教会の順で各教会の紹介、歴史や教勢、工夫している活動、現在悩んでいる点などが発表されました。

討議においては、主に三つのことについて活発に意見交換がなされました。一つは日本正教会の信徒数が減少していることです。特に神父様方から、会報を印刷するコピー機がない等、伝道の環境が整っていないという地方教会の現状が説明されました。また否定的なことばかり言うのではなく、礼拝の喜び、その体験の蓄積を大事にすること、そしてそれを土台にして神品、信徒が共に協力して宣教に励むことが大切である、ということ

が確認されました。また、正教会を宣伝していくことを信徒の方にもっと積極的に行って欲しいということ等が話されました。

第二に信徒の子供、孫の世代のことについて話されました。特に日本人の信徒の子供がどの教会も少ないが、幼児洗礼を受けさせることは、信徒の親としての責務なのではないか、というご意見がありました。また大阪教会の方が、復活祭の卵染めを子供たちに呼びかけ、多くの子供たちが参加した、という体験を話してくださいました。また教会によつては日曜学校をしたいのだが、それを行うスタッフがいないという現状がある、ということも話されました。

第三にこれから京都に建設される「西日本主教区教区センター」の利用方法について、意見交換をしました。代表者懇談会のような形で、これからも信徒の方から積極的にアイデアを募っていくこと、聖歌の研修会を行うこと、イベントを行う様々な年齢層の方を集めること、などの意見が出されました。また、パウエル及川神父様から、教区センターの建設は西日本主教区の発展の始まりにすぎず、これから教区センターを積極的に活用し、主教区の教勢発展に努めたいというお話がありました。

最後にこのような場を今後も多くつくりたいということを確認し、閉会祈祷をして散会しました。そのため新しく建設された京都の教区センターで来年三月一〇日に第二回の教会代表者懇談会を開催する予定となっています。

（後藤記）



大阪大空襲70年 写真パネル展の開催

大阪ハリストス正教会

三月での空襲では南大阪等、大阪中心部に焼夷弾攻撃が加えられ、いよいよ大阪市もこれから本格的攻撃の危険な状態におかれた。：第二回の大空襲では、事無きを得たのであるが、六月の第三回の大空襲は、遂に聖堂を焼きはらったのである。：回りは火の海となり、遂に待避せざるを得ず、その間に聖堂に焼夷弾が数発命中し、木造の大聖堂は数時間にして灰燼になってしまったのである。」(「アレキセイ三谷神父の記憶」より)

大阪大空襲は、計八回も行われたのですが、その第三回目である6月7日に、大阪の天満橋近くの石町(こくまち)一丁目にあった生神女庇護聖堂が焼失してしまいました。その日から70年目を迎えた本年、悲しみや苦しみを乗り越えてきた歴史と、平和の大切さを、多くの人たちと分かち合いたいとの趣旨から、大阪ハリストス正教会として、写真パネル展「石町一丁目の歴史」三橋楼とハリストス正教会を開催しました。

場所は、その石町一丁目のすぐ近くにある「大阪府立労働センター(エルおおさか)」のギャラリー2でした。このような催しは、およそ教会内できらびやかで、なかなか教会から離れての開催とはなっていないかもしれませんが、今回は、たくさんの方々に、正教会の存在を知ってもらおうよい機会となりました。

「三橋楼(さんきょうろう)」という有名な料亭旅館を買い取って会堂とした時の貴重な写真、石町にそびえ立ったありし日の聖堂の写真、大空襲の悲惨さを訴える



2015年(平成27年)5月12日(火曜日) 夕刊 読売新聞



戦後70年

白壁の聖堂 焼失前の姿

中央の跡地に近い府立労働センター(エル・おおさか)でパネル展示する。最終日には同センターで祈りをさげる。

1945年6月の大阪大空襲で被災した大阪ハリストス正教会(大阪府立労働センター)の焼夷弾による焼失前の姿を、写真数枚を整理し、10月10日から70年を迎えるのを記念して、元高級料理旅館跡に建てられた木造ビザンチン式の聖堂の歴史と平和祈願のため同教会が6月5日、7日、大阪市中

大阪ハリストス正教会

空襲で被災 写真初公開へ

焼失を免れた生神女庇護聖堂(大阪府立労働センター)の焼失前の姿を、写真数枚を整理し、10月10日から70年を迎えるのを記念して、元高級料理旅館跡に建てられた木造ビザンチン式の聖堂の歴史と平和祈願のため同教会が6月5日、7日、大阪市中

大阪ハリストス正教会

大阪・天満橋南詰め付近にあった高級料理旅館「三橋楼(さんきょうろう)」の建物に転居し、1987年に創立された同旅館は、1995年、明治政府の方針を協議する「大阪会議」を控え、大久保利通、木戸孝允が最初の会合を持った場所として知られる。

資料、戦後の仮聖堂の写真、今の吹田の教会にも現存するこうした歴史を物語る門柱や鐘の写真など、約40点を展示しました。また、三谷神父さまが聖器物などを防空壕に避難させていたおかげで、大阪教会では今もその一部が使用されていますが、そうした聖器物や三谷神父さまご夫妻の罹災証明書なども展示しました。

6月5日(金)、6日(土)、7日(日)の三日間だけの展示でしたが、来場者はのべ200人を超えました。近くに住むお年寄りや歴史に興味のある方々、インターネットや新聞を見て来られた方々が、熱心に写真を見つめ、説明文をしっかりと読んでおられました。

6月7日という記憶すべき日には、ギャラリー内で、「大空襲によって永眠したすべての人々」のためにリテイヤを献じ、祈りました。

(水口記)



こども会 夏休み イベント

「日曜美術館」 放映後、見学希望者が相次ぐ 豊橋教会

日本正教会の黎明期に今日に残る多くのイコンを書いたイリナ山下りんは、最近では教会外の美術愛好家にもよく知られるようになりました。豊橋教会にも5点ある山下りんの作品を尋ねて来会する市民も多くあります。特に今年三月八日、NHKの「日曜美術館」『祈りのひとみ、山下りんと東北』で盛教会、北麓教会、そして震災で焼失した山田教会に残るイコンが、そこで営まれる信仰生活とともに紹介されて以来、「山下りんのイコンを見せてほしい」という問い合わせの電話がひっきりなしに入るようになりました。番組では山田教会の信徒が、幼時から見慣れてきたイコンが失われてしまった悲しみを述べていたが、あらためて自分たちも聖堂のイコンを大切に守っていかなければならないと痛感しました。

(酒井記)



正教基礎講座閉講

二〇一四年四月から一五年三月にわたり計十二回、正教基礎講座が行われました。前半はダヴィド水口神父様が「聖書概論」と題して新・旧約聖書に関する基礎知識や全体像について講義されました。後半はエフ・レム後藤神父が「正教定理神学」と題して正教会の教義について講義しました。神戸教会の方四名、大阪教会の方一名が受講し、最後の回にはダヴィド水口神父様より卒業証書が手渡されました。なお、受講者の中から大阪教会のソロモン川島兄が今年度九月より東京正教神学院に入学されます。神学校においても、なお一層の研鑽を積まれることをお祈りしています。

(後藤記)

日曜学校夏休み行事 「光の子会」

大阪

開催日の8月1日と2日は高温注意報が出ていましたので婦人会の方々には大量の麦茶と氷を用意してもらい、熱中症に注意しながら出来るだけ室内で過ごす時間を多く取りました。大阪教会・神戸教会からの参加者32人は全員2日間を無事に過ごすことができました。

今年のテーマは『教会のシンボル』でした。

聖堂のあちこちで目にする「ぶどう、鳩、オリブの葉、星などの模様にはどんな意味があるか、を水口神父に解説してもらいました。お話しに続きハリスティナ西口姉の指導でステンドグラス風の工作をしました。教会のシンボルや子どもたちに人気のキャラクターを下絵に



「光の子会」は大阪教会で30数年前から続いている日曜学校の行事ですが、数年前から参加者の傾向が変化し、今年は無信者のご家族や外国人のお子さんが半数を占めました。ときには英語やロシア語での会話が聞こえてきたり、21世紀の日本正教会の姿をかいま見るようでした。

正教会全体では今や高齢化を感じないわけにはいきませんが、少なくとも「光の子会」では将来の正教会を担う子どもたちの笑顔をたくさん見ることが出来ます。国籍や受洗・未受洗を気にせず、来年はもったくさんの子どもたちが参加して【教会のお友だち】を作ってほしいと思います。

(水口敦子記)





「地引き網」

名古屋

八月八日、立秋といいなから猛暑の中、知多半島の南海にて、名古屋教会主催、西日本主教教区後援の夏のイベント「地引き網とバーベキュー」が開催されました。及川神父さまをはじめとして遠く京都や大阪、徳島などからの参加者を合わせて五十三名という盛会ぶりでした。まずは東浜海岸で、

してプラ板に写し色を塗り、アルミホイルをくしゃくしゃにしてプラ板と重ねて額に入れると、まるで窓の外から光が入っているように見えるステンドグラスのような作品が出来上がりました。あまりの美しさに子どもたちだけでなく保護者も挑戦し、全員が作品を完成させました。

晩祷の前には聖堂内でシンボルの模様をみんなで見、祈りのなかで「主あわれめよ」を歌いました。

夕食、縁日、花火とお楽しみが続き、この日は12人が教会に泊まりました。

日曜日は参加者のうち6人が領聖に預かり、まさに「光の子」となりました。

昼食後には、午前中に作成した『預言者エリヤ』の紙芝居を大人の方々の前で披露し、たくさんの方々の拍手をいただきました。この日の午後の外気温は36度まで上昇しましたが、子どもたちは毎年恒例の水鉄砲遊び、すいか割りを暑さも忘れて盛り上がっていました。

松島神父さまによる網の成聖の後、二手に分かれて海岸を何度も往復して網をひっぱります。生きのいい魚がたくさん網に入っていました。いなか、ぼら、鯛、たこ、舌平目、鰯、黒鯛、こちなど取れました。その後、海岸から車で十分ほどの南知多グリーンバレーに移動して、魚はもつぱらお刺身にして、他はミティティ（ルーマニアのハンバーグ）やソーセージ、焼きそばなど、バー



ベキューをしました。最後に子供たちはスイカ割りでも盛り上がり、暑いなかではありましたが、楽しい一時を過ごすことができました。（伊藤記）



「苦しみを受け…」

十字架挙栄祭に

司祭 ゲオルギイ松島雄一

「我ら人々のため、また我らの救いのために、ポンティピラトの時、十字架に釘打たれ、苦しみを受け…」(ニケア・コンスタンティノープル信經)

「私たちの救いのために」 イイススは十字架で苦しみを受けました。私たちの救いのためには主の苦しみが必要でした。でも、あらためて「なぜ？」と問われると、さて…。

「イイススの宣教が思い通りであれば、主の苦しみはなかったはず、…苦しみは主の宣教活動のしくじりの結果に過ぎず、主の思い描いていた『救い』には本来必要なかったのかもしれない」、そんな疑問さえ浮かびかねません。

しかし「一つの聖なる公なる使徒の」教会(信經)は主の十字架の苦しみと死を「我らの救いのため」と信じてきました。もちろん正教は十

字架を復活から決して切り離しません。至聖所の大十字架の裏には復活の主が描かれます。しかし十字架は、死ななければ復活はあり得ないという、不可欠の論理的な前提条件にすぎないものではありません。考えてみて下さい。もしそうなら、なぜあれほどの苦しみが必要だったのでしょうか。お釈迦様のように弟子たちに囲まれ安らかな死を死に、三日目にニツコリ復活！ではなぜだめなのでしょう。最愛の「独生子」の苦しみが神の目論見もくろみはずれの不幸な結果ではないなら、何か理由があるはずです。

人が、私たちが、この世に生きることは苦しいことだからです。そして、その苦しみには意味がなければならぬからです。初代教会は

この神秘を「おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで」と讃えました(「コリ」2・7)。主は私たち人が背負わねばならない条件は、罪の他すべて背負いました。「代わりに」ではなく「共に」です。もし私たちの罪に対する刑罰の苦しみを、主が「代わりに」十字架で受けて下さったというなら、なぜ私たちは依然として苦しみにあえぐのでしょうか。むち打ちと磔はりつけの苦しみをはるかに凌ぐ苦しみがこの世にあり続けるのでしょうか。

人となった神・ハリストスの苦しみは私たちのこの苦しみを神と共にする苦しみに変え、復活にいたる道へと意味を与えて下さった、…そうであってこそ、主の十字架の苦しみは、私たちの救



いとつて意味があり、また私たち自身の苦しみも無意味ではなくなるのです。それを信じないなら、この世の苦しみはぶつけようのない憤怒の炎に自身を燃やし尽くしてしまうだけの不条理に過ぎません。誰がいつたい、そんな苦しみに「耐えなさい」などと、言えるでしょう。

「神は不公平だ、自分だけがどうしてこんな不幸せなんだ」と叫ぶ人がいつの時代にもいます。私たちの心の中にもいるかもしれません。いや、確かにいます。まったく切実で正直な叫びです。そう叫ぶ人たちは信仰が足りないなどと裁くことのできる人はいません。「神は私たちが耐えられないような試練は与えません」(コリント前10・13)などとして顔で使徒の口まねをする資格のある人などいません。人は

その叫びへの答えを「この世」では見つけられませんが、

主イエスでさえ、私たちのこの「神様！ どうして」という叫びを裁かず、反対に十字架の上で「ご自身が、「神よ、神よ、どうして、私をお見捨てになつたのですか」と叫ばれました(マトフェイ27・46)。何と神であるお方が！ 私たちと共に、

「神からさえも見捨てられてしまった」という人の究極の苦しみを、人の究極の孤独を共にしてくださいました。しかしここにこそ、私たちの存在の最も深いところから私たちを揺さぶり、溢れでてくる喜びがあります。共にされた孤独はもはや孤独ではありません。私たちの苦しみはすべてこのハリストス、生命であるお方に導かれ、生命であるお方と共に、生命であるお方に向かつての歩みへと変えられました。ここにクリスチャンの希

望があります。この神・ハリストスの愛を受け入れ、その十字架の苦しみを今度は私たちが進んで分かち合うならば、主とともによみがえりへの、いのちへの道を歩み出せるという希望です。この希望に励まされ私たちは洗礼を受けたのです。また日々、信仰を新たにしてくのです。

正教会は「十字架挙栄祭」、この日に至聖所から主の十字架を高々と掲げ私たちの真ん中に持ち出し、美しく花で飾り、それに伏拝し、口づけします。そこにあるのは、私たちの罪の償いとしての十字架であるよりはむしろ、「生命を施す」十字架です。「恐れることはない、私はすでに世に勝っている」と宣言されたお方の勝利のしるしです。



ヤコフ・チハイの故郷をたずねて

モルドヴァ・ブコヴィナ

「みんなで歌う単音聖歌」のルーツ

マリア松島純子

あまり知られていませんが、日本正教会聖歌の揺籃期に貢献したヤコフ・チハイとドミトリー・リヴォフスキーはモルドヴァ（当時はロシア帝国領ベッサラビア）の出身でした。ヤコフはパウエル沢辺琢磨が「ヤコフさんが来て、本格的な聖歌ができた」と述懐するように、兄アナトリー掌院とともにニコライの宣教を助け、日本語聖歌の礎を作りました。チハイ兄弟の故郷ベッサラビアは、もともとはルーマニア人の国モルドヴァ公国の東半分で、一五世紀にトルコ領となり、露土戦争（一八一二）の結果ロシアに割譲されました。彼等の生まれたタラシフツィはブコヴィナ地方の一角にあり、オーストリア・ハプスブルグ帝国やルーマニアと国境を接し、さまざまな伝統の行き交う多言語、多文化、多民族の地域でした。ブコヴィナの伝統はチハイの音楽を通して日本にも伝えられました。

修道輔祭アナトリー・チハイは、一八六九年から七一年に日本宣教団発足のためにロシアに帰国しキエフに立ち寄ったニコライに出会い、日本伝道を決意します。キエフ神科大学を卒業したアナトリーは修道司祭に叙せられ、その年の暮れに来日し、一八九〇年に病を得て帰国するまで、およそ二〇年にわたって函館、大阪、東京でニコライと共に、伝道に身を捧げました。七四年アナトリーの弟ヤコフも聖歌教師として招聘され、日本語の祈祷文に音楽を付け、音楽指導を行い、日本聖歌の基礎を築きました。

ふたりはベッサラビアの北西端ホティン県のタラシフツィ村（現在はウクライナ、チェルノフツィ県）で教会の堂守を勤めるデミトリーの家に生まれました。タラシフツィのある山岳地域はブコヴィナ、「ブナの

国」という美しい名前で呼ばれます。ブナの森はオーストリア、ルーマニアへと国境を越えて広がり、モルドヴァ公国時代に建てられた美しい修道院群があります。その中のひとつ、ネアムツ修道院はこの地の修道の中心で、聖パイシー（ヴェリチコフスキー 1721-1792）を慕って各地から修道士が集まり、『フィロカリア』のスラブ語訳が出版され、弟子たちは各地に修道院を開き、ネアムツの伝統を伝えました。ブコヴィナではスラブ語、ギリシア語、ルーマニア語で、さまざまな伝統の聖歌が歌われていたことが確認されています。

アナトリーとヤコフは初等教育を終えるとキシノウ（ロシア語読みでキシニョフ）の神学校に進みましました。アナトリーは神学校在学中にアトス山のゾーグラフ修道院で修道士となりました。ゾーグラフはブルガリア系ですが、モルドヴァ公国のステファン大公が設立に関わったことからルーマニア人にも縁の深い修道院でした。ゾーグラフの図書館には今も日本語の祈祷書を含むアナトリーの蔵書が保管されています。アナトリーは一八六六年神学校に戻り、卒業後キエフ神科大学に進みました。

ヤコフは卒業後ペテルブルグの宮廷教会聖歌隊に入り、聖歌のほかにピアノ、チェロ、バイオリンを修得しました。ペテルブルグの音楽界にはウクライナやモルドヴァの出身者が多く、ペテルブルグ音楽院を創設したアントン・ルービンシュタイン、聖歌の作曲家として有名なグレゴリー・リヴォフスキー（一八八〇年に来日した輔祭デミトリーは甥にあたる）を中心としたモルドヴァ人サークルがありました。さて一八七二年ニコライは宣教拡大のために東京に拠点を移し、函館をアナトリーに任せます。アナトリーは早速、初等教育のほかに基礎的な正教要理と誦経、聖歌などの礼拝実践を教える伝教学校と詠隊学校を開き、ヤコフの助けを得て日本語聖歌を拡充し、聖歌譜を作成しました。続いて東京でも六年制の神学校とは別に短期コースの「伝教学校」「聖歌学校」が設置されました。「唱歌譜」と書かれた単音聖歌譜は何度も再版され、基本的な正教教理や礼拝の式順を学んだ若い伝教者や聖歌教師はこの『唱歌譜』を手に全国津々浦々に出てゆき、福音を伝え、新しいメンバーに聖歌を教え、礼拝を行

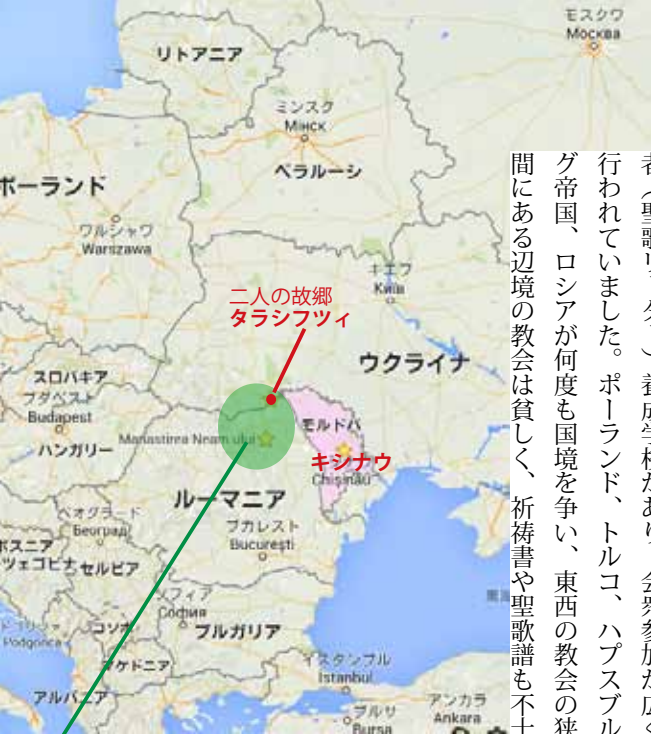


聖歌者ヤコフ・チハイ

修道院の
口ネツ



アトスのゾーグラフ修道院に保存されているアナトリーの蔵書（サワ鐸木道剛兄提供）



ブコヴィナ地方



聖院アナトリー・チハイ

い、教会を築きました。伝教者派遣と単音『唱歌譜』を用いた会衆参加による礼拝実践はニコライ宣教の基本的な推進力となりました。
ところで、単音聖歌譜、会衆唱、短期学校、いずれも当時のロシアではあまり見られない方法でした。ニコライはこれらのアイデアをどこから得たのでしょうか。鍵と考えられるのがチハイ兄弟の故郷です。
函館ではアナトリーの主導で東京に先んじて短期コースの伝教学校や聖歌学校が開校され、単音聖歌譜が作られました(一八七四年の報告書)。ベッサラビアでの状況は不明ですが、隣接するカルパト・ロシアや西ウクライナでは、短期養成の教会教師学校、先唱者(聖歌リーダー)養成学校があり、会衆参加が広く行われていました。ポーランド、トルコ、ハプスブルグ帝国、ロシアが何度も国境を争い、東西の教会の狭間にある辺境の教会は貧しく、祈祷書や聖歌譜も不十

ブコヴィナのひとつヴォ

分で、ましてやお抱えのプロの聖歌隊など望むべくもありません。村人たちは聖歌リーダーの後について聞き覚えで歌い、自分たちの歌で正教の礼拝を守りました。歌はほとんど口伝えでしたが、後に単音聖歌譜も出版されました。二〇世紀のロシア人正教聖歌研究者ヨハン・フォン・ガードナーは「カルパト・ロシアの正教とユニアの混在する村の教会では、会衆全員が聖歌に参加していた。…聖歌リーダーが歌い始め、…会衆が唱和する。…歌はユニゾン(斉唱)が基本で、しばしば平行するメロディ(多分三度)やバスを加えて即興の合唱で歌われた」と報告しています。そのほかロシアと異なる点としては、四声の場合、日本では最初から男女混声で編成されましたが(一八七五年)、ロシアでは通常男声と少年の編成でした。しかし西ウクライナやガリチア(ポーランド)では西方教会からの影響で、早くから混声が実践されていました。

『唱歌譜』の音楽を詳しく調べると、さらに意外な事実が見えてきました。従来、日本の聖歌は当時ロシア教会の標準とされたペテルブルグの宮廷教会聖歌集(オビホード)の引き写しと考えられてきましたが、実はトロパリの八つの調のうち、二調、五調、六調、七調はチハイ兄弟の故郷、ブコヴィナ地方のロシア系伝統として歌われていたメロディに酷似しています。

正教聖歌では、ふつう八調に基づいて歌うときには「オスモグラシエ(八調)」という手法が用いられます。聖歌作成の基本技能で、聖歌者は調ごとに異なるメロディ・パターンのセットを記憶しており、それを部品として組み合わせるとロパリヤステイヒラを歌います。ヤコフも当然オスモグラシエを修得していたので、自分が記憶している調のメロディの

パターンを心に浮かべながら日本語聖歌を組み立てたはずで、メロディ・パターンのセットは地域によって微妙に異なります。

興味深いのは五調で、「主日トロパリ」にはブコヴィナのメロディが用いられ、同じく五調と指定される「主や爾は崇め讃めらる(早課のポリエレイ後)」は、ペテルブルグの宮廷聖歌集のメロディで歌われています。トロパリ以外にも「ポリエレイ」、「信経」「天主経」「ヘルビムの歌」の二番も宮廷聖歌集と異なるメロディが用いられており、キエフ聖歌やルーマニアで歌われていたビザンティン聖歌の影響も考えられます。日本の聖歌は私たちが思いこんでいるほど「ロシアの丸写し」ではなかったのです。



二人の学んだキシノウ神学校の建物
現在は国立図書館



チハイ等が編纂し、日本の地方教会を支えてきた唱歌譜。通称ヨコナガ



ブコヴィナ地方にはたくさんの修道院があり、観光客も多い。聖パイーシイ(ヴェリチコフスキー)のいたネアムツ修道院は18-19世紀、修道と出版の中心地であった。上は1819年に書かれた聖歌写本で、19世紀なかばにモルドヴァの新ネアムツ修道院に運ばれ、キシナウの国立古文書館に所蔵される。

ニコライの眼は常に「伝道」に注がれ、常々「自分が伝えるのは『ロシア正教』ではなく、『正教』であると語り、ロシアで標準的でなくても伝道に有効と考えられるものは躊躇なく採用しました。ですからチハイの故郷であるブコヴィナのメロディを用いることにも、四部合唱に女声を交えることにも、特別の聖歌隊でなく会衆唱を実践することにも、何のこだわりもなかったでしょう。「みんなで歌う」会衆唱は日本の伝統となり一四〇年にもわたって地方教会を支えてきました。残念ながら、いまだに単音聖歌を「四声よりも劣った形」「四声が歌えない場合の間に合わせ」のように低く見る向きがありますが、どちらも正教聖歌の伝統です。むしろ古い伝統であるビザンティン聖歌やロシアの古聖歌(スナメニイ聖歌)は単音で、合唱聖歌は16世紀ごろから西ウクライナで即興のハーモニーとして始まり、ペテルブルグの宮廷聖歌はそれを発展させたものです。前述のガードナーは老若男女が声を合わせて歌う会衆参加の礼拝の美しさと力強さに打たれて、「音楽に伴われた祈りのことばは歌われて心の深淵へと染み入り、歌う者のたましいは喜びに満たされる。・・・祈りに参加することで、参拝者はもはや外からの見物人ではなく、教会の霊的一致に入ってゆく」と語っています。どんな形であっても、参拝者が心をひとつにして祈ることができれば、教会はハリストスの体として息づき、神の国の美を顕し、ますます多くの人を福音の喜びに招き入れることができます。

正教が国教であった帝国ロシアと異なり、日本ではニコライやチハイ兄弟は教会形成にゼロから取り組みました。日本の正教人口はいまでも〇・〇一%以下です。彼等が進めた『会衆唱』による礼拝の充実は二一世紀の日本宣教に大きなヒントを与えています。

ISOCM 正教会聖歌学会

<http://www.isocm.com/>

6月9日から14日まで、ISOCM正教会礼拝音楽国際協会の第5回研究会が東フィンランド大学で開催されました。20カ国から60名の参加者は、研究者、聖職者、作曲家、聖歌担当者など多彩な経歴で、研究分野もビザンティン、ズナメニイ、セルビア、ルーマニア聖歌、古文書研究、テキスト分析など多岐にわたっていました。マリア松島純子姉は3回目の参加で『日本正教会聖歌略史、聖ニコライの宣教と会衆唱』について発表し、好評価を受けました。

研究発表の合間には聖歌コンサートや歓迎パーティが開かれ、各国の「パスハのトロパリ」を歌い、正教の「多様性と一致」を楽しみます。隔年で開催され、今回は2017年の6月の第二週です。学会なので多少の英語は必要ですが、正教会の仲間の和気あいあいとした楽しい集まりです。次回はあなたも参加してみませんか。





主教区活動のご案内



◆教区センター開設記念 「正教連続講座」2016年予定

一般市民への正教会紹介をねらいとして、西日本教区センター（京都）を会場とし、隔月で連続6回の講演会を行います。9月の開講を予定しましたが人事異動との兼ね合いもあり、開講を来年1月に延期しました。外部宣教としても、信徒にとっても正教会を知る良い機会です。ご友人などお誘い合わせの上、ご参加下さい。

1月11日（月祝） 司祭エフREM後藤師	7月18日（月祝） 司祭ゲオルギイ松島師
3月21日（月祝） 司祭エフREM後藤師	9月19日（月祝） 輔祭グリゴリイ伊藤師
5月5日（木祝） 司祭ゲオルギイ松島師	11月3日（木祝） 輔祭グリゴリイ伊藤師

◆祈りと交流の集い

聖セルギイ祭 合同聖体礼儀、昼食会と講話（大阪）

10月8日（火） 10:00

人吉 生神女庇護聖堂修復記念式典（熊本県人吉市）

10月17日（土） 17:00 主日徹夜祈り 19:00 夕食会（会費制）

10月18日（日） 9:45 聖堂成聖式 10:00 主日聖体礼儀

12:30 祝賀会（参加費無料）

福岡 亜使徒聖ニコライ伝道所 五周年記念式典（福岡市）

11月22日（日） 18:30 夕食会（会費制）

11月23日（月祝） 10:00 主日聖体礼儀 12:00 祝賀会（参加費無料）

「原爆永眠者慰霊祈禱会 in 広島」

9月23日（水祝） 14:00~15:00

戦後70年を期に、広島平和公園内「原爆供養塔」前にてパニヒダを献じます。

松山ロシア人兵士墓地慰霊祭

11月3日（火祝） 11:00（現地集合）

グリゴリイ小川公 神父による墓前パニヒダ

九州北部 福岡伝道所 「聖歌学びの会」

1月11日（月） 10:00 聖体礼儀、13:00~15:00 聖歌の学び

◆冬季セミナー 「聖山アトスの修道士たち」（仮題）

2月11日（木祝） 西日本教区センター（京都）

パウエル中西裕一神父のご子息ニコライ裕人兄が、原則的に撮影禁止のアトス修道院の修道士たちの祈りの生活を、聖山アトス首席代表者の特別の許可を得て撮影した貴重な写真の数々を前後一週間ほど教区センターに展示。セミナー当日はアトス滞在経験の豊かなパウエル神父の講話、アトス紹介ビデオの上映、閉会後の自由参加の茶話会を予定しています。（詳細は追ってお知らせします）

◆出版案内

レインボーシリーズ七巻完結

全国宣教委員会として発刊してまいりました「親子で学ぶ正教会」レインボーシリーズが、この度、その第7巻目「亜使徒聖ニコライ」で完結いたしました。1、「機密って何でしょう」、2、「神さまの国へ」、3、「私たちのイイススさま」、4、「生神女マリヤさま」、5、「旧約のおはなし」、6、「聖人たちの信仰」、7、「亜使徒聖ニコライ」

子供たちの信仰教育のためにはもちろんのこと、大人が読んでみても非常に有益な書です。お求めは各教会まで。



◆西日本主教教区の出版予定

トマス・ホプコ神父 正教の信仰シリーズ第3巻

「聖書・教会史」（近日刊） 翻訳：水口神父、松島神父

2015年冬季セミナー講演録

「ラフマニノフと正教会」2016年2月刊行予定